

中原中也

なかはらちゅうや
山口市
(1907～1937)



【著作】

詩集『山羊の歌』（昭和9・文圃堂）
詩集『在りし日の歌』（昭和13・創元社）
『新編中原中也全集』（平成12／平成16・角川書店）
ほか

明治四十年（一九〇七）、現・山口市湯田温泉に中原病院の六人兄弟の長男として生まれる。小学校の頃から短歌を作り、文学へと傾倒してゆく。中学三年の時、文学に耽りすぎて落第。その後、京都、東京へと移り、同人誌や文芸雑誌に詩を発表。小林秀雄や河上徹太郎、大岡昇平などの文人たちとも深く交流する。生前唯一の詩集に『山羊の歌』、没後一年に刊行された詩集に『在りし日の歌』がある。その詩には音楽性があり、中也の詩の世界だけでなく、詩の言葉も、多くの人々の記憶にとどめられている。
愛する人を失い、生きることの憔悴しつものなお、人生に美しさを見出そうとしていた中也の詩は、その天折によって青春性を永遠のものとしている。詩作だけでなく、フランス詩の翻訳も手がけ、ランボオ訳詩集三冊を出版している。
晩年は、郷里山口に帰ることを願いながら、昭和十二年（一九三七）鎌倉の地でその生涯を閉じた。近代詩人としてその名を文学史上に刻み、幅広い年代層に愛読されている。

（文・那須 香）
※写真は「中原中也記念館」提供

帰郷

柱も庭も乾いてゐる
今日は好い天気だ
縁の下では蜘蛛の巣が
心細さうに揺れてゐる
山では枯木も息を吐く
あ、今日は好い天気だ
路傍の草影が
あどけなく恋みをする
これが私の故里だ
さやかに風も吹いてゐる
越置なく泣かれよと
年増婦の低い声もする
あ、おまへはなにをして来たのだと……
吹き来る風が私に云ふ



中也の描いたアポリネールの落書き

中原邸（山口市）

中原中也 年譜

（提供・那須 香）

明治40（一九〇七）年	大正3（一九一四）年	大正4（一九一五）年	大正7（一九一八）年	大正9（一九二〇）年	大正11（一九二二）年	大正12（一九二三）年	大正13（一九二四）年	大正14（一九二五）年	昭和元（一九二六）年	昭和2（一九二七）年	昭和3（一九二八）年	昭和4（一九二九）年	昭和5（一九三〇）年	昭和6（一九三一）年	昭和7（一九三二）年	昭和8（一九三三）年	昭和9（一九三四）年	昭和10（一九三五）年	昭和11（一九三六）年	昭和12（一九三七）年
七歳	八歳	一一歳	一三歳	一五歳	一六歳	一七歳	一八歳	一九歳	二〇歳	二一歳	二二歳	二三歳	二四歳	二五歳	二六歳	二七歳	二八歳	二九歳	三〇歳	

4月29日、現在の山口市湯田温泉一丁目に生まれる。
4月、下宇野令小学校に入学。
1月、弟亜郎病没。
5月、山口師範附属小学校に転校。
『婦人画報』『防長新聞』に短歌を投稿。4月、県立山口中学校に12番の成績で入学。
4月、共著で歌集『末黒野』を刊行。「温泉集」と題した28首を収める。
3月、落第。4月、京都の立命館中学に転校。11月、詩集『ダダリスト新吉の詩』に感銘を受ける。
4月、長谷川泰子と同棲。7月、詩人富永太郎を知る。
3月、泰子とともに上京。4月、富永の紹介で小林秀雄を知る。11月、泰子は小林の許へ去る。
4月、日本大学予科文科に入学。9月退学。その後、フランス語を学ぶためにアテネ・フランセへ通う。
11月、諸井三郎らが属する音楽団体「スルヤ」と交流。
小林の家で大岡昇平を、大岡の紹介で安原喜弘を知る。5月、父謙助病没。
4月、同人誌『白痴群』を河上徹太郎らと創刊。
4月、『白痴群』6号で廃刊。9月、中央大学予科に編入学。
4月、東京外国語学校専修科仏語部に入学。5月、青山二郎を知る。
9月、弟怡三病没。
4月、第一詩集『山羊の歌』の編集に着手。
5月、同人誌『紀元』に参加。12月、上野孝子と結婚。『ランボオ詩集（学校時代の詩）』を三笠書房より刊行。
10月、長男文也誕生。12月、『山羊の歌』を文圃堂より刊行。
小林秀雄が編集責任者となった雑誌『文学界』が詩の発表の場となる。
『四季』に同人として参加。
11月、長男文也病没。12月、次男愛雅誕生。
1月、千葉市千葉寺の中村古峡療養所に入院。2月退院。鎌倉に転居。
9月『ランボオ詩集』を野田書房より刊行。『在りし日の歌』の原稿を清書し、小林秀雄に託す。10月、鎌倉養生院に入院。結核性脳膜炎と診断され、10月22日、死去。鎌倉の寿福寺で告別式。

《没後》
昭和13（一九三八）年

「坊や」草稿

